

地方民営鉄道の経緯と今後 ——銚子電鉄を事例に——

小林 恵子

1910年、地方へのアクセスと産業の活発化という目的を持った軽便鉄道法の施行を機に、軽便鉄道が日本各地で建設された。鉄道が陸上交通機関の最たるものとされていた頃には、産業・人口が乏しい地域にとって、軽便鉄道は安いコストでつくることができる交通手段だった。しかし、1930年代に入り、バス路線が敷設され、また1960年代に自家用車が普及してくると、地方民営鉄道の地位は低くなってきた。軽便鉄道のひと

つ、銚子電鉄はこれまで、地元の水産業や醤油醸造業などの産業と関わってきた。一方、銚子電鉄は、早くから観光客の誘致を行い、現在では鉄道そのものを観光資源として乗客の吸引力を持つ努力をしている。最近では、鉄道事業とは直接関連のない、土産物の生産を行い、評判を呼んでいる。赤字経営は続くものの、銚子電鉄は利用客の強い支持を得て、国の補助金に加え、千葉県、銚子市の援助も受けている。

商店街の活性化 ——早稲田商店会を事例に——

小林 伶

今日の悪化した経済状況のもとで、日本の多くの商店街は、衰退の一途をたどっている。しかし、こうした状況の中で、新宿区の「早稲田商店会」は、多くの新しい試みに挑戦し、町の活気を取り戻そうとしており、マスコミをはじめ各界から注目を集めている。私はフィールドワークを中心に、商店会の取り組みを追った。論文では、人々の活動状況を紹介するとともに、そうした活動が、今後、どのような形で他の商店街に应用が可能であるかという考察を行った。

論文の第3章で、東京都全体及び、新宿区の小売業と比較して、「早稲田商店会」の状況を、具体的な数値を用いて示した。第4章では、「エコサマーフェスティバル」や「エコステーション情報発信基地」といった商店会独自の取り組みを、聞き取り調査の内容と併せてを紹介した。第5章では、第3・4章を受け、「早稲田商店会」の取り組みが成功した要因を考察した。そして、商店会の今後を展望するとともに、その他の商店街に対する提言を行った。

たちもり 日月の「謎」を追う

日月 綾子

「私の先祖は、なぜ“日月”姓を名乗ったのか」という疑問を解明するため、研究を行った。まず、苗字に関する基礎知識や、その歴史的背景を学んだ。そして、その知識をもとに、聞き取り調査な

どフィールドワークを行い、「日月」姓のルーツ（地域・時代）を追いかけた。石川県（加賀）が「日月」の発祥地であるとわかると、地域の時代背景を調べることで、そのルーツをさらに調査し

た。「日月」姓のルーツは特定できたものの、「なぜ」について多くの仮説が考えられた。それらの裏付けを得るのは困難だった。最終的には、仮説を証明する証拠が少なかったため、それぞれの説について想像を膨らませたほうが良いと判断して、論を進めた。最も分からなかったものの大切

だと思うことは、先祖たちが生きた時代の思想、あるいは彼らが日頃何を考えて過ごしていたのか、ということである。名前の数だけ面白い由緒がある。誰しも、何世代もの多くの先祖がいたからこそ、現在の自分がある。このように考えるうちに、不思議な気分になった。

山間地における地域商業と生活支援システムづくり

——島根県川本町を事例に——

福 間 み ゆ き

中山間地は、ますます生活しにくい環境になっている。人口の減少、高齢化、それらに伴う商店の減少である。中山間地の地域商業は弱体化している。商店が減ったため、住民にとって“最寄り”の商店はだんだん遠くなり、生活の不便を感じる人は少なくない。現状として、行政（自治体）側は商業、とりわけ小売業の支援に消極的である。また、地元の商工会は、商店主にやる気を出させることや、商店主全体をまとめることに苦勞している。商店主どうしの

意志疎通が図られておらず、まとまりに欠けるため、新しい取り組みを実現するのは、たいへん難しい状況にある。しかし、生活者の利便を確保するために、地域商業の強化は欠かせない。地域の活性化のためにも、地域商業の力が必要である。地元商店ならでの小回りの利くサービスにより生活利便性を確保し、また、行政・商工会・商店主が連携を深めながら、将来的に生活支援システムを運営できるような商業基盤を作らなければならないと考える。

磯部温泉の成立と展開

——別荘地から温泉地へ——

三 村 さ お り

群馬県安中市にあるひなびた温泉地、磯部温泉は、明治期に別荘地として一時的ではあるが、その発展をみた。現在の磯部温泉の姿は、私たちが「別荘地」としてイメージする地域と比べ、意外性を感じさせる。先発の別荘地であった磯部温泉が別荘地ではなくなり、山ひとつ隔てた軽井沢が後発ながら、別荘地の代表格となったのである。本研究では、このような歴史的事実が、近代という時代背景において、どのような意味を持っているのかを、当時の史料をもとに明らかにした。まず、近代の別荘地は、西洋との接触のなかで希求された、夢を実現する空間

だった。別荘地は、当時のリゾートとして中心的な存在だった。次に、磯部温泉が別荘地として成立、発展した背景は、明治18年の信越線（高崎～横川）開通し、東京からのアクセスが便利になったこと、明治17年の東京～高崎の鉄道開通で、群馬県の位置がリゾート地として適当と考えられたこと、磯部温泉の開拓者が西洋医学に基づく温泉効能を宣伝したこと、などである。また、磯部温泉と軽井沢の関係は、位置的には近いものの、それぞれに時代の影響を受けながら、地域の特性にあわせ発展したと結論づけた。